

「この子とそれ」

—初稿—

2026/6/2

米俵

〈人物表〉

瀬尾 綾香 (26) 会社員

宮坂 達也 (29) 会社員

ハル 達也のペット・ミニブタ

1. 達也の部屋・リビング（昼）

綺麗に片付けられた部屋。棚には、豚の置物、ペット（ミニブタ）の写真が置かれている。

宮坂達也（29）、瀬尾綾香（26）が入ってくる。

ミニブタ（以下、ハル）が2人を出迎える。

綾香、興奮した様子で、ハルに近づく。

綾香 「はじめましてー」

綾香、達也の方を見て、

綾香 「触ってもいい？」

達也 「大丈夫だよ」

達也、キッチンの方へ。

綾香、ゆっくりと手を伸ばし、撫でる。

綾香にぐいぐいと近づくハル。

綾香 「かわいいー」

達也、綾香の様子をキッチンから嬉しそうに見る。

達也 「ハルと遊んで。ご飯用意するから」

綾香、慌てて立ち上がり、

綾香 「ごめん。手伝うよ」

達也 「いいって。ハル、お客さん好きだから。遊んであげて」

綾香 「でも……」

達也 「美味しいの作るからさ」

綾香 「ありがとう」

綾香、ハルと触れ合う。

× × ×

綾香、ソファでハルの写真を撮っている。

ダイニングテーブルにはサラダや飲み物が並べられている。

達也 「食べようか」

綾香 「ありがとう」

綾香が席に着く。

達也、豚の生姜焼きを綾香の前に並べる。

達也、席について、

達也 「いただきます」

綾香 「ねえ。これって……牛肉とか？」

達也、少し笑って、

達也 「え？ 違うけど。牛肉の生姜焼きも美味しそうだね」

と、肉を口に運ぼうとする。

綾香 「ちょっと待って」

達也 「豚肉嫌いだった？」

と、ゆっくり箸をおろす。

綾香 「そうじゃなくて……よく食べられるなって」

達也 「なんで？」

綾香 「ハルちゃん飼ってて」

達也 「ハルと、このお肉は違うでしょ」

綾香 「同じ種類だよね……」

と、達也を見つめる。

足元にはくつろいだ様子で眠るハル。

沈黙。

達也 「ハルの横で食うなってこと？」

綾香 「場所の問題じゃなくて……」

達也 「じゃあさ、オウムとかインコ飼ってる人は焼き鳥や唐揚げは食べないわけ？」

綾香 「オウムやインコは食べないでしょ」

達也、溜息。

綾香 「普通、食べれないんじゃないかなって」

達也 「普通って……俺が変みたいだけど」

綾香 「そういう意味じゃ……」

達也 「そういう意味でしょ」

綾香、黙る。

達也 「ハルのこと可愛がってないように見えた？」

綾香 「そうじゃない。むしろ可愛がってるように見えたから」

達也 「だから？」

綾香 「余計に分からなくて」

達也 「このお肉はハルじゃないよ」

綾香 「そんなの分かってる」

綾香、足元のハルを見る。

綾香 「簡単に分けてるのが無理ってこと」

達也 「分ける？」

綾香 「この子はこの子。それはそれ、みたいに」

達也 「簡単じゃないならいいの？ 泣きながら食べたら？」

綾香 「そういうこと言ってるじゃないけど」

達也 「でも、そう聞こえる。苦しんで食べたなら許せるの？」

綾香 「許せるとかでもないよ」

達也 「綾香って、ベジタリアンじゃないよね？」

綾香 「違うけど」

達也 「牛肉食べるんだよね？ 鶏肉食べるんだよね？」

綾香、頷く。

達也 「豚肉も食べてたよね？」

綾香 「今、食べれなくなっただけ」

達也 「都合良すぎでしょ」

綾香 「都合いいこと言ってるのは分かってる」

達也、白米を乱暴に口に入れる。

達也 「それで？」

綾香 「さっきまで、ハルちゃんのこと、この子可愛いって撫でてたんだよ」

達也 「うん、知ってる」

綾香、テーブルの生姜焼きを見つめる。

綾香 「そのあとに、急にこれをただの豚肉として見ろって言われても無理」

達也 「だから、ハルの肉じゃないって」

綾香 「お肉が生き物に戻った感じ」

達也 「全部生きてたものだよ」

綾香、黙る。

綾香 「達也ってさ、大切に育てて出荷しましょうっていう食育、大丈夫な人なんだね」

達也 「命の大切さを知るみたいなの？」

綾香 「そう。あんなのトラウマだよ」

達也 「知らないまま、感謝もなく食べてる方が怖いよ」

綾香 「毎日お世話して、可愛がって？」

達也 「だから、その重さが分かるんですよ」

綾香、達也を見つめる。

その後、目を伏せて、

綾香 「なんか、違ったかもしれない」
達也 「何が」
綾香 「私が思ってた優しさよ」
達也 「なに？ 俺の話？」
綾香 「線を引ける優しさなんだなってこと」
達也 「線？」
綾香 「だって、猫とか犬を食べる環境で育ってたら、飼ってても食べるってことでしょ？」
達也 「……食べるかもね」
綾香、引いた表情。
達也 「待って。例えでしょ？」
綾香 「そうだね……」
達也 「実際に食べてるわけじゃないし。環境が違えば、感覚も違うって話で」
綾香 「……常に食べる側にいるからそう言えるんだよ」
達也 「食べる側？」
綾香 「そう」
達也 「俺たち食べる側でしょ？ 普通に」
綾香 「普通に、が怖い」
達也 「食べられる側の気持ちになれたってこと？」
綾香 「人間を食べる巨大異星人がいたとして」
達也 「急になに」
綾香 「急にじゃないよ。ずっとその話してる」
達也、黙る。
綾香 「その種族が、人間を飼ってるの。名前つけて、可愛いっていつて。写真撮って」
達也 「……」
綾香 「それで、その横で人間の生姜焼き食べてたら？」
達也 「人間の生姜焼きって言うなよ」
綾香 「嫌でしょ？」
達也 「嫌だよ」
綾香 「それをやってるんだよ」
達也 「……違っよ」
綾香 「どこが」

達也 「俺は巨大異星人じゃない」

綾香 「そこ？」

達也 「大事だろ。まず巨大異星人ならこの部屋に入れない」

綾香 「ふざけてんの」

達也 「ごめん。ふざけないとちょっと無理だった」

静寂。

綾香、達也をジッと見つめる。

達也、気まずそうに生姜焼きを見る。

ハル、気持ちよさそうに伸びをする。

達也の携帯が鳴る。

達也、携帯を確認する。

達也 「来週の予約取れた」

綾香 「なかなか取れないって言ってたお店？」

達也 「そう。サムギョプサルが上手いって有名な……」

綾香、黙る。

達也 「店、変える？」

ハル、鼻を鳴らす。

(おわり)